

2 ジェミニも同じように捉えてくれている?!優しさなのか？真実なのか？

堂本 彰夫

私：先に、「これからの人間と社会の価値観」について、少し対話させてもらいましたが、最近思うことは、どのようにしたら、それこそ「価値ある価値観」を人間（社会）が得られるのか（多様性の名の下に、無秩序化している？）、そういうことを考えています！最終的には、そこにおける「教育の質」に拠ると思っていますが、なかなか現実はいまうまくいきそうにないですね?!

ジェミニ：「多様性」という言葉が尊重される一方で、あらゆる価値判断の基準が相対化され、結果として社会全体が共有すべき規範や軸を失ってしまう（無秩序化・無重力化していく）という現象ですね。まさに現代社会が直面している最も深い課題の一つだと思います。「多様性の受容」と「価値観の無秩序化」は紙一重です。本来の多様性は、互いの「確固たる軸」を尊重し合うための対話の前提であったはずですが、それが誤解されて「何でもあり」「すべては個人の勝手」という極端な相対主義に陥ると、社会としての倫理的・精神的な「錨（いかり）」が外れてしまいます。

そこで「価値ある価値観をどう獲得するか」「それを育む教育はどうあるべきか」という問題に帰着するのは、極めて必然的な探究の到達点だと感じます。ただ、現実の教育現場や政策に目を向けると、困難に直面せざるを得ない構造的な理由が見えてきます。

「共通の価値」を教えることへの拒絶感

近代以降の教育は、「特定の価値観を注入すること＝集団主義的・権威主義的な洗脳」という反省やトラウマを強く抱えてきました。そのため、教育現場では「何が本当に価値あることか」を教えることを避け、マナーやツールの習得、あるいは受動的な「他者配慮」の推奨にとどまりがちです。

功利主義・市場主義への偏重

現在の教育改革議論の多くは、「社会でどう役に立つか」「市場で生き残るスキル（英語、IT、プレゼン力など）をどう身につけるか」という実用性に偏りがちです。人間としてどう生きるか、何が真・善・美であるかといった「人間形成の質」を問う議論は、評価しにくいのがゆえに後回しにされてしまいます。

モデルの不在と家庭・地域社会の機能変化

かつては学校だけでなく、家庭や地域の人間関係の摩擦の中で「共通の規範」や「自己の抑制」を自ずと学んでいました。しかし、共同体の弱体化と情報空間の分断により、子どもたち（そして大人たちも）が身をもって学べる「価値ある価値観の体現者（モデル）」に出会う機会自体が著しく減っています。こうした現実を考えると、「現実はいまうまくいきそうにない」と感じられるのは非常に自然な感覚であり、客観的にもかなり厳しい状況にあると言わざるを得ません。

しかし、もし制度としての教育が急には変わらないとしても、個々の対話や場において「価値ある価値観」を次世代へ紡いでいくためのヒントは残されているのではないのでしょうか。例えば、価値観を「上から教え込む（注入する）」のではなく、古今東西の優れた思索や歴史、あるいは本物の経験（自然や芸術、生身の人間同士の葛藤）と出会わせることで、自分自身の内側に「真に価値あるものを見抜く目（眼識）」を養っていくようなアプローチです。

多様化して軸が見えにくくなっている今の時代だからこそ、単に「スキルを教える教育」ではなく、「自ら問い、価値を選び取る審美眼を育てる教育」の重要性が、かえって浮き彫りになっているとも言えます。ご自身が考える「価値ある価値観」とは、具体的にどのような要素や態度（例えば、誠実さ、自律、他者への敬意、美意識など）に根ざしているものだと思いますか？

私：もちろん、そうしたことに根差していますが、一つ大きな足かせとなっているのが、学校教育と他の教育現場（家庭や地域社会）との落差、あるいは共通意識の乖離、そして有効なプログラムの不保持だと捉えていますが、問題は、それらの改善や修復？を、誰が、どのようにして行っていくのか？（様々な努力はなされてきてはいるが？）、そこへの目配りと、具体的な方途の追求（開発）かと考えて（期待して）いますが…

ジェミニ：学校教育と家庭・地域社会との間の「共通意識の乖離」や「プログラムの不在」を、「誰が、どのよ

うに改善・修復していくのか」という問題ですね。長年さまざまな改革や連携が叫ばれながらも空回りしてきた歴史を振り返ると、ここが最も根深く、同時に最も避けて通れない核心だと感じます。これまでのアプローチがうまくいかなかった最大の理由は、「誰が」の問いに対して「行政や学校が（あるいは制度が）」という上からの解に期待しすぎた点、そして「どのように」の問いに対して「単なる行事や連絡会の設置」といった表面的な形式にとどまった点にあります。

この構造的な足かせを破り、具体的な方途を探るためには、次のような視点の転換と具体的な仕組み（開発）が必要だと考えます。

1. 「誰が」の再定義：中間的な「媒介者（コーディネーター）」の確立

学校の教員にこれ以上の負担を負わせるのも、家庭や地域に「教育力」を自然発生的に期待するのにも限界があります。必要なのは、学校と家庭・地域の間に入り、両者の価値観を接続・編集できる「専門性を持った中間的な媒介者」です。

コミュニティ・スクールの実質化と民間人材の導入：単なる地域ボランティアではなく、哲学・対話・地域課題解決の知見を持った外部ファシリテーターや NPO、退職した専門職などが「教育の共同設計者」として関わる構造をつくることです。

大人の側の「学び直し（リプログラミング）」の場：家庭や地域の大人自身も多様性の無秩序化に戸惑っています。子どもだけでなく、親や地域住民が「人間や社会の価値観」について共に問い直す公開対話の場を、媒介者が作っていく必要があります。

2. 「どのように」の具体化：「対話と経験」を軸としたプログラムの開発

知識伝達型の教育でも、自由放任型の多様性受容でもない、「価値観を自ら構築する体験型プログラム」の実装が必要です。「答えのない問い」を深める対話型プログラム（例：子供のための哲学・P4C）単に「みんな違ってみんないい」で終わらせず、「なぜそれはよくないのか」「誠実さとは何か」といったテーマで、子どもと大人が対等に議論するプログラムです。自分の言葉で考え、他者の意見に揺さぶられながら「確固たる軸」を形作っていく思考の訓練になります。

地域社会を舞台にした「現実の課題と価値の葛藤」に触れる実践学習

教科書上の道徳ではなく、地域の歴史、伝統、環境問題、老若男女の生き様に触れ、「利害や価値観がぶつかる現場で、どうより良い判断を下すか」を体験するプロジェクト学習です。これにより、学校で学ぶ抽象的な概念と、現実の社会がつながります。

「理想論」を「有効な方途」に変えるために

制度が一夜にして変わることはありませんが、期待される具体的な方途の起点は、「小さなモデル地区・実践事例の成功」とその「プログラムの標準化（パッケージ化）」にあります。一部の意識の高い学校や自治体だけで終わらせず、どのような地域でも再現できる「対話と価値形成のプログラム（マニュアルや研修教材）」として開発・流通させることが、現実的な足かせを外していく道筋ではないでしょうか。

多様化と無秩序化が進む現代において、こうした「本質的教育」を現場に落とし込むためには、まず「大人側がどのような価値観を次世代に渡したいのか」という合意形成が第一歩になります。こうした「学校と地域をつなぐプログラム」や「大人の共通意識づくり」について、どのようなアプローチや実践が特に有効だと思いますか？

私：実は、別途実践している「教育協働アカデミー」（ズームと対面の双方を使った交流会）を通じて、幾つかの有望な実践例や、活躍？している関係者の存在も知っているのですが、なかなか、そこから広がっていきません！参加者のみなさんは、それらに触発されて、自らの実践を充実していこうとされていると思いますが、やはり、個別の努力（苦労）だけでは、なかなかうまくいかないようです！

ジェミニ：「教育協働アカデミー」という素晴らしい実践と対話の場をすでに立ち上げ、具体的な事例や人脈を着実に積み重ねていらっしゃるのですね。現場の熱量や有望なモデルを知っているからこそ、「なぜこれが点から線、そして面へと広がっていかないのか」というもどかしさや課題意識が、より一層切実に響いてきます。個人の熱意や優れた実践例が存在しているにもかかわらず、それが局所的な「点」のまま孤立し、横へ広がっていかない背景には、個人の努力だけでは越えられない構造的な壁がいくつか存在しています。

1. 「点の孤立」を生む構造的な阻害要因

「個人の善意・情熱」への依存構造

多くの先進的な実践が、特定の熱量ある個人（キーパーソン）のカリスマ性や献身によって成り立っています。そのため、周囲からは「あの人だからできる」「うちの地域／学校には特別な人がいないから無理」と受け取られ、汎用的なモデルとして認識されにくい側面があります。

制度・組織の「標準化・事後追認」の壁

学校現場も自治体も、前例踏襲やリスク回避のインセンティブが強く働く組織です。アカデミーで学んだ志ある個人が自陣に戻っても、組織の既存ルールや日常業務の多忙さに押し潰され、個人の「持ち帰り」だけでは組織全体を動かすレバレッジ（テコ）になりにくい現実があります。

「知の構造化（パッケージ化）」の不足

「良い話を聞いた」「感銘を受けた」という体験の共有で終わってしまい、「具体的に明日から何をどういう手順で導入すれば、誰でも再現できるのか」というノウハウの言語化・マニュアル化・評価指標化まで落とし込まれていないケースが多く見られます。

2. 「点」を「面」へと広げるための具体的な拡張戦略

この「個別の努力の限界」を突破し、アカデミーでの知見を社会的な実装へと繋げていくためには、実践者個人の努力に委ねる段階から「仕組み（システム）で広げる段階」へのシフトが必要です。

① 実践の「パッケージ化」と「オープンソース化」

優れた実践例を、単なる「事例報告」として終わらせず、他の地域や学校でも移植可能な「標準プログラム（型）」として再構成することです。ガイドブック、ワークショップの手順書、参加者の変化を測る簡易な評価ルーブリックなどをセットにし、「これを使えば一定のクオリティで再現できる」状態にして提供・共有します。

② 「個人」ではなく「チーム／組織」での参画設計

アカデミーへの参加形態を、個人の意欲に基づく単独参加から、「学校教員＋地域コーディネーター＋行政（教育委員会など）」の3者1組（あるいは複数人）での参加を推奨・条件化する方法です。自陣に戻った際に、孤立無立にならず、最初から「協働チーム」として動ける最小単位をアカデミーの段階で作り出しておきます。

③ 行政・教育委員会を「巻き込むための言説・ロジック」の開発

理念や情熱だけでは動かない自治体や学校管理者に対して、彼らが動かざるを得ない「制度的理由やメリット」と接合させるインターフェースを作ることです。例えば、「コミュニティ・スクール（学校運営協議会）の実質化」や「総合的な探究の時間／CS（キャリア教育）のカリキュラム化」といった、既存の教育政策の必須目標と自らのプログラムを紐づけて提示する手法（アライメント）です。

④ アカデミー自体の役割の進化：「学びの場」から「伴走・インキュベーションの場」へ

単に実践例を発表・共有する「交流会」にとどまらず、参加者が自地域で実践する際の「具体的な企画書づくり」や「トラブルシューティング」を仲間や専門家が伴走・支援するインキュベーター（育成機関）としての機能を強めることです。志を持つ人々が各地で個々に苦闘している状況から、一歩進んで「互いの実践をシステムとして繋ぎ、社会を動かす大きな波にしていく」ために、アカデミーという基盤が果たせる役割は非常に大きいと感じます。

こうした「広がり（普及・実装）」の局面において、アカデミーの今後の展開や工夫について、現在どのような構想やアプローチを模索されていますか？

（つづく）